# インド留学記

## その7

# シク教の祈りの根底にあるもの

東方研究会
研究嘱託
保坂俊司

前回紹介した暗やみの神秘体験が私の人格を変えたなどという大げさなことにはならなかったのですが、しかし、この体験がわたしのインド理解に大きな変化をもたらしたことはたしかです。というのも、私はどちらかと云うと物事を機械的に判断する部類の人間に属しており、神仏は敬いこそすれこれといって余り関心がなかったのです。こんなことをいうと宗教を研究する学徒が何を云うのかと叱られそうですが、私自身はそれまで社会科学、特に経済や政治について研究していたので、その方面の関心が余り育たなかったのでしょう。そして、もう一つの理由は、恐らく曲がりなりにも宗教学を学習したその仕方が、宗教心を理解できる様なものではなかったのであろうと、思われるのです。

私は以前、恩師中村元先生から「日本の研究者の多くは文献ばかりに拘ってその内容を検討すること、あるいはそこに書いてあることの意味を積極的に考え、自分なりに理解しようとする人が少ないことは多いに反省すべき点ではな

いだろうか。」という意味のことを伺ったことがあります。その時、私はその意味する所を十分理解できなかったのですが、しかし、この一種の神秘体験以来、先生のこの言葉が自分なりではありますが少し理解できるようになったのではないかと思っています

というのも、ある程度宗教を学問として研究する方法を学んだ私としては、例え不可能であるにしても極力主観的な見方は排除しなければならないと思っていたのです。確かに、この見方は大事であり、それを否定するものでは決してありませんが、しかし、それのみに終始するのは何と無く言語のゲームか、パズルを解いているような味気無い思いがするのは私だけでしょうか。宗教は人間の最も人間らしさが現れたものであり、それを研究するのにあまりに文字やその用法に拘りすぎることは何か大事なものを失ってしまうような気がしてならなかったの

です。私はこんなことを考えながら、納得のいかぬ日々を過ごしていました。それは、恐らく自分の目の前に全く今までの自分の理解を越えた宗教の世界が在ったからでしょう。特に、シク教の聖地アムリッサルのゴールデン・テンプルと呼ばれるハリ・マンデルでの体験は、私には大きな驚きであり、また私の年来の疑問の解決にヒントを与えてくれるものでした。

私がパンジャブにいた丁度その頃、シク教徒は一部の急進派がインドからの独立を叫び、テロや暗殺を繰り返しており、日に日に情勢は険悪となっていました。戒厳令が敷かれ自由に町を歩くこともままならなかったのです。

私自身も何回か危険な場面に遭遇したこともあり、人々は死と向かい合わせの生活を強いられていました。

昂ぶる人々の心は、その面相にはっきりと現れておりましたし、時々乗る相乗りタクシーで何度もライフルや拳銃などで武装した人々と一緒になりました。また暗殺現場にでくわしたこともありました。まさに町は一触即発の状態だったのです。

ところが、このような町の状態をよそに、寺院の中はまったく静寂そのものなのです。照りつける太陽光を反射して金色のお堂が、巨大な四角の池の中で輝いている姿は、一切の動きを飲み込んでしまっているのです。

私はこの静けさに何とも云えぬ神秘的なものを感じたのです。それは、寺と町を明確に分ける分厚い壁という物理的な隔たりではなく、精神の隔たりです。武器を持って血走った目の人々が、この空間に入るやいなやみるみる別人のように心の静寂さをとりもどしてゆくのです。

私にはこれは驚きでした。まさに武器を持った鬼のような毛むくじゃらの大男が、祈りの場

で見せるその姿は、私が今まで経験したことのない玄妙なものでした。

以来、わたしはこの「祈り」ということの意味を考えつづけています。

シク教では、この祈りを非常に重要視します。勿論、どんな宗教でもそれは同じともいえますが、しかし、シク教徒の祈りは他とちょっと違った意味があるように感じました。そこで、私は彼等の祈りについて色々研究することにしました。

詳しくは、次回に紹介することにしますが、その一端を紹介しましょう。

シク教では聖典『グラント・サーヒブ』が、生きたグル（教主）として崇められます。従って、この聖典を朗唱することは、シク教徒にとっては特別の意味があるのです。シク教には、この聖典を輪番で昼夜を問わず読み続ける宗風があります。彼等をグランティーと呼ぶのですが、彼等はこの四〇〇年間にたったの七回しかこの行を休んだ事がないのだそうです。そして、つい最近ではインド政府軍によるゴールデンテンプル襲撃（？）の時1週間休んだだけだといいます。その執念ともいえる祈りへの思いはなんなのでしょうか。次回から検討して行きましょう。